
GANTZ Paradise Lost

ΛKΛSICK = RĚCORD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ Paradise Lost

【Nコード】

N7545Z

【作者名】

AKASICK"RECORD

【あらすじ】

一度死んだ人間が集められるという謎の黒い球体、GANTZ。今日も死者達が生を求め、戦い続ける。

そこへ転送されてきた工藤直人達はGANTZのミッションに巻き込まれることになる・・・

今此処に、生か死をかけた壮絶な戦いが始まるのだった・・・

<これから登場予定の作品>

GANTZ、未来日記、デュラララ！、魔法少女まどか マギカ、

バカとテストと召喚獣、 B L O O D +

プロローグ 序章

『てぬえ達のいのさわ、無くなりました。
新しい命お、どう使おうと、ワタスの勝手。
と云ふ理屈なわけだす。』

GANTZ、それは一度死んだ者たちが再び生を手にする為に残された最後の砦。

死んだ者達は生を掴むべく、様々な異星人との戦いに身を投じる事となる。

しかし、それは常に死と隣り合わせであり、GANTZメンバーは日に日に一人、また一人と脱落していく。

そして、今宵も新たな参加者が現れる。

リスクを冒してでも生を手にするため・・・

ブローグ 序章 後書き

次回より、第1話が始まります。

ようこそ、死者のゐなちま（笑）（前書き）

『怪物と闘う者は、その過程において自らも、怪物と化さないよう
気をつけなければならない。深淵をこちらが覗き込むとき、深淵も
またこちらを覗き込んでいるのだから』 （善悪の彼岸より抜粋）

ようこそ、死者のみなさま(笑)

ピピピピッ・・・ピピピピッ・・・

「クソッ、また朝かよ・・・」

俺はベッドの上で毛布に包まりながら、独りごちる。

俺は朝が嫌いだ。

理由は単純。

一日が始まると思うと、無償に腹が立つからだ。

俺にとっての一日は起きて、飯食って、学校行って、くだらねー授業受けて、帰ってくる、そんだけ。

それが延々繰り返される。

そんな人生送っていくなら、いつそ、死にたい。どうせ俺が死んでも誰も泣きはしないのだから。

自己紹介が遅れたな。

クドウナオト

俺は工藤直人。

市内の高校に通う、高校2年生だ・・・

親はいる。

クズのような親だな・・・

「さっさと起きなさい、このグズ！」

お袋が怒鳴る。

「まったく、るっせーんだよ、女郎がよオ・・・」

つか、実の母親が実の息子に対してこんな事言つかフツー。しょうがねーから起きてやる。

「・・・・・・・・」

無言のまま、黙々と朝飯を食う。

そんな俺にお袋は冷たくこう言った。

「存在も消えれば良いのにね」

そう、俺が朝が嫌いなのはこれも理由だ。

そして学校へ行く・・・

退屈な授業を聞き流しながら、俺は外を見る。

外は雲ひとつない快晴だ。

まあ、別に晴れようが、雨が降ろうがつまらんこの日常は変わらないのだが。

「おい工藤、工藤、聞ってるのか？」

目線を教室に戻すと、国語教師の宮本がこっちを睨んでいた。

「へいへい、サーセン、サーセン」

適当に謝っておく。

「・・・お前は全てにおいて、不真面目すぎるんだ！この前の期末だって・・・」

うるせーよ、お前に俺の何が分かるか・・・

そして学校が終わり、家路に就く。

家が近くに見えたとき・・・

「お主、ナオ、ナオか？」

後ろから懐かしい声がした。

振り向くと・・・

「おおっ、やはりそうじゃ。久しぶりのうー！」

そこにはかつての旧友がいた。

「秀ちゃん！？久しぶりだな！」

彼は木下秀吉。

俺が唯一心を許せる親友だ。

「小学生ん時以来だな」

「うむ。お主も元気そうで何よりじゃ」

「そういや、お前今どの学校？」

「文月学園じゃ。ナオは？」

「俺は篠原高校。そんなに良い学校じゃねえけどな（笑）」
楽しく談笑する俺と秀吉。

すると・・・

「！？あれは・・・」

秀吉が車道を指差す。

そこには・・・

酔っ払いのオッサンが倒れこんでいた。

しかも、最悪な事に、車道のだ真ん中で。

すると刹那、秀吉が車道へ飛び出そうとした。

「って、おい、何やってんだよ秀吉！？」

「何って、決まっておろうが。あの人を助けるんじゃ！」

俺は他人に任せりゃいいだろうと思った。

しかし、あたりに人はいない。

チツ・・・しゃーねー！

「分かった、俺も手伝おう！」

「すまぬ、ナオ！」

俺と秀吉は車道へ飛び出した。

しかし、次の瞬間・・・

・・・ドゴウツ・・・

鈍い音と共に、身体が宙を舞った。

身体から鮮血が噴出し、目の前が真っ暗になる。

そう、俺の人生は突然終わったのだ。

そして気がつくと、俺は何故かフローリングの床に秀吉共々伸びていた。

「あ．．．．．れ？」

おかしい。

俺は確かに車に轢かれて死んだはず。

でも、生きてる．．．

「なんじゃ、ここは．．．．．」

秀吉も動揺している。

死んだはずの俺達、この謎の部屋、そして．．．．．

「おい、何だ．．．コレ．．．」

目の前にある巨大な黒い球状の物体。

すると、その黒い物体の表面にメッセージが浮かび上がる。

『ようこそ、死者のみなちま（笑）』

ようこそ、死者のみなさま（笑）（後書き）

次回、第2話「行ってください」

行つて下ちい

「「・・・・・・・・え？」」

死・・・・・・・・ん・・・・・・・・だ・・・・・・・・？俺達がか？
じゃ、なんで俺達は生きているんだ？

俺の頭の中を様々な疑問がよぎつた。
すると物体の表面に新しいメッセージが浮かび上がる。

『てぬえ達のいのさわ、無くなりま』た。
新しい命お、どう使おうと、ワタスの勝手。
と云ふ理屈なわけだす。』

「これって・・・・・・・・」

「どうやら、ワシらは本当に死んでいるようじゃな・・・・・・・・」

そんな・・・・・・・・マジかよ・・・・・・・・

しかし、不思議と悔しくはなかった。（秀吉は結構落胆しているが・
・・）

これが死ぬということなら案外安いもんだ。
これでもう、あんな親と一緒にいなくても良くなったのだから。
クソつまらない日常からも解放されたのだから。

「それにしても、この黒い球は一体何なんじゃ？」

秀吉は黒い球を観察している。

俺の見る限りでは鉄製のようだ。

確かになんだろうか？

近くに寄って球体を爪で弾いてみる。

コンッ、コンッ……

冷たい金属音が響く。

やはり、鉄製のようなのだ。

すると突然……

「！？」

黒い球体の中から、レーザービームのような光線が床に照射され始めたのだ。

俺と秀吉は驚いて球体から飛びのいた。

「マジで……何なんだ、コイツ……？」

しかも、そのレーザービームはと言う訳か人型を作り始めた。そしてその人型は徐々に具現化していく。どうやら形からして女性のようなのだ。

「まさか、俺達もこうやってここに来たのか？」

「そのようじゃの……」

とか何とか言っていると、その人型は完全に具現化した。
……アレ？

「コイツは……」

「まさかとは思うが、天使……？」

め・・・め・・・滅茶苦茶美人じゃねーーーーかああーーーー
ーーーーつつつ！！！！！！！！！！！
綺麗に整った顔、縦ロールにまとめられた金髪、そして何と
も・・・

「胸、デカすぎ・・・」

俺のストレートと真ん中だ・・・

「・・・お主、鼻血を止めぬか・・・」

秀吉が何か横から冷たい視線を浴びせてくるが気にしない。
にしてもこの娘、なんか様子が変だ。

着ている服はビリビリだし、首の部分だけ不自然に血で赤く染まっ
ている。

しかし、首元には傷が無い。

「・・・ん・・・」

あ、起きた。

「あ・・・れ・・・？こ・・・こは？」

どうやら彼女も状況が理解できてないらしい。

ま、今来たばかりだし、当たり前といえそうだな。

「・・・あれ、まどかちゃんは・・・？」

「まどか？」

どうやら、ここに来る直前に側にいた子の名前のようにだ。

「あ・・・あのさ・・・」

「ハ、ハイ？」

「君の名前は？俺は工藤直人。」

とりあえず、名前を聞く事にする。

「巴マミです・・・」

マミ、か・・・可愛い名前・・・ってそうじゃない、そうじゃない。
「君は何故ここに来たのさ？」

「分からない・・・でもお菓子に魔女に首を噛み千切られて・・・
気がついたらここに・・・」

「・・・・・・」

うわ、痛い子・・・

「あ、あの・・・多分、信じてくれないとは思いますが・・・」

「いや、あり得なくはないの・・・」

と秀吉。

・・・え！？何で！？

「考えてみれば、ワシらは車に轢かれたのに生きているし、それなら
まだしも瞬間移動までしているではないか？普通ではあり得ない
ような事が二度も起きているのじゃ。」

確かに・・・言われてみれば・・・

事実、俺達は車に轢かれても生きている。

しかも、知らないうちにこの部屋に来ていた・・・

なら、この子の言う、お菓子の魔女とやらもいるのかも・・・

「そうかもな・・・」

「そういうことじゃ。諦めて現実を認めよう、ナオ・・・」

「あの・・・お二人とも、死んでるんですか？」

「ああ、どうやらそういう事らしい」

「そうですか・・・」

落胆する俺達。

すると・・・

あああああーたあああーrrrrらしいiiii
あああああさがきたああああ

いきなり妙なBGMが流れ始める。

「!? 今度は何じゃ・・・」

「・・・ラジオ体・・・操・・・?」

すると、また新しいメッセーヂが球状の表面に浮かび上がる。

『てぬえ達わ、このお方お、倒Jに行つて下ちい

野球星人・・・特徴：よわい、ウゼえ

好きな物：女、野球

くさぐせ：しゃははは

行つて下ちい（後書き）

次回、第3話「人間ぢやねえ」

人間ぢやねえ

「『野球・・・星人?』」

何だコレ・・・星人って事は宇宙人なのか・・・?

しかし、見た感じはほぼ人間である。

「どうやら、コレを倒せば良いようじゃな・・・」

「倒すったって、どうやってだよ」

「何か武器の様な物があればいいんですけど・・・」

・・・バシヤツ・・・

すると突然、球体の中からラックが展開された。

「!?今度はなんだ・・・?」

「・・・なんじゃ、コレは・・・」

秀吉がラックの中からハンドガンの様なシロモノを取り出しながら言う。

「武器じゃないですか?」

「うむ・・・じゃが、どう使うんじゃ・・・?」

俺もラックから一丁取り出してみる。

どうやらハンドガンの様だが、トリガーが何故か上下二つある。

「撃てんのか、コレ」

ためしに下の方のトリガーを絞る。

すると、バシヤツという音と共に銃身が展開した。

しかし、特にこれといった変化なし。

次に上下両方のトリガーを絞ってみる。

もしかしたら弾かなんかが出るのかも、と思ってその辺にあった俺のバッグで試し撃ちをする。

・・・ギョーン・・・

「……………え、こんだけ？」

ハンドガンからは弾はおろか、ビームの様なものすら出てこない。
出てきた物と言え、ギョーンという音だけ。

「何だコレ、使い物にもならねーや」

と言つてハンドガンを放ろうとしたその時……………

……………パァーン……………

俺のバッグが音を立てて破裂した。

「……………ナオ、今お主何をした？」

「いや……………何も……………」

「……………ひよつとして、時間差で破裂するタイプの武器じゃないですか……………」

「……………そのようじゃな」

何だこれ……………スゲー……………

コイツ使えば野球星人とやらを倒せそうだ……………

「なあ、秀ちゃん」

「何じゃ」

「これ、勝手に持つて行つて良いのか？」

「むう、どうじやろうか？ま、持つていて損はないじやろう」

そう言つて秀吉は制服のポケットにハンドガンを突っ込んだ。

すると……………

「キヤーッ」

マミが悲鳴を上げた。

「ど、どうした!？」

「あ．．．あ．．．頭が．．．頭が．．．」
マミは顔面蒼白になりながら秀吉を指差す。
「は？頭？」

俺は秀吉をチラッと見る。

．．．．！？

何と秀吉の頭がほとんど消えかかっていた。

「ひ．．ひ．．秀吉、お．．．お前．．．」

「？ワシがどうかしたかの？」

「消えかかてる（ますよ）！！！！」

「何を言うんじゃ、ワシが消えるわけ．．．．．」

そう言つて秀吉は何気なく自分の腕を見る。

「．．．．．あるの．．．．」

腕も消えかかっていた。

「ワシはこれからどうなるんじゃ！？」

どうするもこうするも、俺はア然とするしかなかった。

そうこうしている内に徐々に消えてゆく秀吉。

既に身体の5分の4が消え、いまあるのは額から上だけだ。

そして．．．．

「．．．．．消えた．．．．」

秀吉は消滅した。

「何だっただんですか、今は．．．．」

「わからない、でも何かヤバそうだな．．．」

とりあえず、何があつてもいいように先ほどのハンドガンは装備し

ておく。

ついでにラックの中もひとしきり漁ってみる。

ラックの中にあつたのはハンドガン数丁とライフル（のようなもの）が六丁、それにアタツシエケースが三つだった。

「何でしょうか、コレ」

マミがアタツシエケースをしげしげと観察しながら言う。

よく見るとケースの外面には稚拙な字で『きよにゆう』と刻まれていた。

「この際役に立ちそうな物は何でも持つとくか・・・」

「ええ・・・」

俺は『ナオちゃん』と刻まれたケースを手を取った。

マミもケースとライフルを手取る。

すると・・・

「・・・ん、来たか」

俺の指先が消え始めた。

「私も消えてる・・・」

マミも消え始めた。

ゆっくり消えていく俺とマミ。

「・・・あれ？ここって・・・」

気がつくとは何故かさっきの部屋の外に出ていた。

しかも上を見ると・・・

「東京・・・タワー？」

俺達は東京タワーのすぐ真下にいた。

「あれって、単に消えてるんじゃないくて別の場所に転送されてたのか・・・」

「でしようね・・・」

マミが持つて来たアタッシェケースを開けながら言った。

「このスーツ・・・着たほうが良いんでしょうか？」

マミはケースの中から黒いウェットスーツ（のようなもの）を取り出している。

「さあ、どうだろうか」

俺もケースからスーツを取り出す。

スーツには顎と胸、背中、足首の部分にスイッチのような器具がついていた。

一見するとコスプレにも見えかねない。

でも何となくカッコいいかも・・・

「・・・着てみるか」

俺はマミに言った。

「そうですね」

マミも同意した。

しかし外で生着替え、という訳にもいかない。

とりわけマミは女の子だからなおさらだ。

とりあえずその辺にあった公衆トイレで着替える事にする。

5分後・・・

俺はウェットスーツを着て外へ出た。

それにしても不思議だ・・・

このスーツ、採寸もしたはずなのに俺の体格とほぼジャストなのだ。

それこそ、俺専用にあつらえたみたいだな・・・

「すいませーん、待ちました？」

そんな事を考えているとマミが着替えを終えて女子トイレから出てきた。

マミもスーツをぴっちり着こなしている。

・・・にしても、胸でかいなあ・・・

人間ぢやねえ（後書き）

次回、「ソッコー殺す」

あと、次回から戦闘シーン入れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7545z/>

GANTZ Paradise Lost

2011年12月31日10時46分発行